

艦これ この世界を守る光達

ロクリース

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

艦娘と深海棲艦との戦争が終わり人々はその前までの日々を取り戻した。

そんな中ある日ある出会いをキツカケに世界の偽りとゆう平和の塗装が剥がれてゆく、その時彼等は守るべき物と護りたい物の為に己が力を振るう、その先に平和があると信じて

*注意

この小説には艦娘の扱いが酷い場合があるので注意を、またタグはネタバレを危惧する為随時追加してきます。処女作などで誤字脱字があった場合教えてくださると嬉しいです。また書き忘れてましたが、設定では艦これアニメの約1年半後 となっておりませう。それに伴い数名年齢設定が変えられてる所はご理解していただけると嬉しいです。

目次

プロローグ	1
居候に無い記憶	4
覆すは予想を超える確信	8

プロローグ

声がしていた、……

俺を呼んでいるのか、俺の、を呼んでいるのか、だけどまだ行けない、みんなの元には、世界を、壊れた海を治さなきゃいけないから、……、

「また、変な夢見たような気が、ま、いつかそれより今日の食べ物探さないといくらアレでもなんか食わんとまずいよね。」

そう少年は森の中を歩いていく、戦争が終わり静かになった海を眺めながらただ一人歩いて行く。

かつて身に起きた事は彼の中から消え去っていた、そんな彼を見ていた者は眩く「目覚めてくれ」と。

「おい、この辺であってるだろうな、こっちはお前の情報頼りなんだから、大丈夫だよな。」

「おうよ任せとけて、……30%あってるから。」

何だその自信無さすぎる言葉は、そう思いつつも足を進めて行く

しばらく経つと向こうから思わぬ提案が、それは

「二手に分かれるぞ！」

いやなんでそうなるそう思いつつも俺は言葉をあえて呑み込み地図を渡され二手に分かれる事にした、そして分かれた先で、……

「あく見つかんね、この辺なんだけどなあ。」

その日彼らは不思議な現象を追ってたそれは森で火柱が上がるとゆうあり得ない現象だ最初は皆アレが起こしていると思っていたが終わっても尚続くそれを人々は気にすらかけなくなっていた。二人は森に進入しそれをネタに稼ごうと企んでいた

「あーダメだ〜」

そう言いつつ地図を見ながら足を運んでいると上から突然

「その先崖だから止まって、落ちるよ」

上からの声に気づき前を見ると崖が広がっていて思わず驚きの声

を漏らす

「あ、危ねえ！もうちよいで落ちる所だったぜ、えーと、あ、ありがとうよ！」

そう木の枝に止まる少年に礼を述べるとその少年は木から降りて来る、その少年の髪は銀色で目は輝くほどの金色をしている

「何しに来たの？こんな森に？」

「俺はちよいと見たいもんがあったな、名前はデュオ、デュオ・クラミスってんだ、お前は どうしてだ？」

「俺はここに住んで居るんだ、名前は、レイ、レイ・ハーツ。」

彼らは軽い自己紹介を済ませデュオはレイに森に来た理由を明かす。

「実はよう、この森で起きる火柱を撮ってそれネタに儲けたくてダチ連れてこの森来たんだ。見た事ないか？」

「いや、見た事ないな、あれ友達は？」

「ああ、そいつとは二手に分かれなあいつならあっち。」

そうデュオが自身が来た方向を指指した瞬間その方向で火柱が上がる。

「ああアレ？火柱って。」

「そうそうアレ撮りたくて来た、じゃねえ！あっち丁度あいつが向かってる方じゃねえか！早く行かねえと！」

「なら任せてデュオここに居てよ、俺が連れてくるよ。」

そうゆうとレイはズボンのポケットからある道具取り出しスイッチを押したするとレアの体は武器の様な物に包まれた。

「ちよっ、おま、それえええ。」

デュオが質問する前にレイは物凄い速さで駆け抜けてく。

その頃ある機械がある音声を出しながら火柱を上げてた。炎の勢いで何と言っているのは分からなかったがいざとなったら彼には知る手があった、しかしそれをする前に機械は自らの身を燃やし切った。そこに丁度レイが現れ少年と会う。

「君がデュオの友達？名前は？怪我してない？」

レイの質問に彼は一つずつ答えて言った。

「ああそうだ、大丈夫怪我はない。名前は清磨、高嶺清磨だ。あんたは？」

「俺はレイだ、デュオのどこまで案内するね、向こうで待ってるように言ってるから。」

そうレイに連れられ清磨はデュオがまだその場に居るか怪しみつつも機械を後に歩いて行く。

居候に無い記憶

清磨はレイに連れられデュオと合流した後話をまとめていたがどうも火柱を上げて消えた機械の事が気になっていた、その横で肌寒いだろうとレイが火を点けようとした時、ドン、と大きな音と共に火柱が上がった清磨もデュオも思わずキョトンとしてしまったが思わず清磨が突っ込む。

「お、おい！これ！この火は?!」

「ああ、これ？これねゼノンで火を点けようとするのと5回に1回今見た感じのが、、ああ！二人共これ撮りにきたのか!」

レイのトボけた返答に清磨は思わずその場に倒れこむ、がデュオはそんな清磨を置いてレイの武器に眼を輝かせていた。

「おい、コレなんだ?!兵装だよなあ、おい！軍の特殊武器だろ?!なんで持ってたんだ?!」

「え、なんだって、それは、、アレ?なんで持ってたっけ?」

清磨はまさかと思いきや、親族はいるのかと試しにレイにそれらを聞くが「わからない、覚えてない。」と。

レイは記憶がなかった半年近くこの森で住んでいるとゆう以外記憶が無いのだ。そこで清磨は最終手段を使いせめてレイの家族とさっきの機械の事と思ったが、

(でない?!答えが、いや他の事に関しても、まさか、、力が?!)

「大丈夫がお前、顔悪いぞ。レイの武器でも見て興奮しろ。健全な男子として。」

デュオの言葉で落ち着きを取り戻し、取り敢えずの今後の事を話した。

まず、レイはこの森を離れないかとゆうものだった。あの機械がまだあつたら危険だし、その方がレイの親族を探しやすいとゆう事だった、デュオはすぐにokと言ったがレイは思わず聞いた。

「いいの?そこまで、今さっき会ったばかりの俺の為に。」

「気にするなデュオも俺もレイに助けられてるんだ。そのぐらい恩返しさせてくれ。その代わり武器は街で使うなよ、騒ぎになるから。」

その言葉が嬉しかったのかレイに清磨にだきついた。

レイはお金はなかったが何故か服は持っておりそれと日記帳を持って気に達と共に森を出た。

その後泊まる家は半ば無理矢理清磨の家に流れ込んだが、清磨の親があつさりokしたためそのまましばらく居候する事に、その後レイはふたより一歳年下の16歳だった事がレイの自供でわかり3人共同年代だと思っていた為驚いた。

その夜レイは清磨家の空いてる部屋で寝る事になり清磨にこれからの事と今日の事の御礼を言った後日記を書き眠りについた。

「おーい、起きなよ、僕は退屈だよ、遊ぼうよ。戦争が終わって暇してるんだよ」

「それなら安心してください。あの男が動きますよ。」

「それほんと!?良かったよもう退屈が過ぎちゃってたから。」

そう話をしてる二人の横で二人の会話を聞く一人の女性の眼には自らの意思が見えなくなっている。

アレから一週間、清磨はレイの武器について調べていたがあまり軍や武器などには詳しくなく、また、ジャンクなどに詳しいデュオもわからない状態だったので詰まっていた。レイの武器には、軍で作られればあるはずの型名が無くこれでレイが軍関係ではないと思われたが、寧ろそれで何故レイが持っているのか余計にわからなくなってしまうていた。そんな時にホームページを見て正に耳寄りな情報が飛び込んできた、それは軍の鎮守府で行なわれる大規模な祭りだった。日替わりに鎮守府を変え開催して欲しいが丁度明日清磨の家から比較的近場の鎮守府でやるらしく、清磨はデュオにある頼みごとをし次の日にすでに我が家に馴染みきつてるレイを連れ鎮守府に向かった。

着いたは良かったものの余りに人が多くレイと逸れてしまった。レイにもお金などは持たせてあるため清磨は一人1番人気の無い

ブースへと向かって行く。

清麿と逸れたレイは人混みもまれ「来なきや良かった。」と力の無い言葉を吐きつつ鎮守府の端の方に出た。

比較的人が少なく、ゆつくりと進んでいると不良に絡まれてる二人の少女を見つける。バレない様に話を聞いていたが、

「ジョーちゃん艦娘なんだってね、お兄さん達と遊ばよいよ。」

「ンダンダ、きつと楽しいだ。」

「チョイ触らんといて。たく、こつちが艦装使えないからついでいいきになりよつて。」

男達の馬鹿な喋りに聞いてただけだがイラついてしまい、またその髪型がまさかのリーゼントで更に馬鹿に見え更にイラついてきた。

レイは二人を助ける事にし一気に物陰からダッシュした。

ゼノンを使つて無くても速く一瞬で不良の一人を後ろから蹴り拘束した。

それと同時の金髪で軍服を着た男性にもう一人も拘束され、その後憲兵達によつてリーゼント達は連れてかれた。

それと入れ違いに一人の少女が息を荒立て走つて来た。

「黒潮ー！、不知火ー！大丈夫ー?!。」

「大丈夫やでー！グラハムさんと、このにいちゃんが助けてくれたねん。」

その後陽炎達は憲兵に状況を話先に話終わつてたレイはグラハムと呼ばれた人と話していた。

「済まないな、助けてもらつて。良かったら名前を、」

「すみませんちよつと友達探してて急いでるんで、それじゃ。」

そうゆうとレイはその場を後にした、元々清麿に「軍の関係者には何か思い出しそうでも近づくな」と念を入れられて居た為これ以上は接触を避けたかつたが、何よりレイ自身女の子が苦手なのである。

そんな事で清麿を探すもまた、迷子になった。

清麿は人間用の武器の展示場に来て居た。ここには余りひとが来ない事はネット調べでわかつていた事だが、それにしても人が居なかつた。

艦娘がここにはいない、などの理由があるにしても、デュオの様にマニアックな人はいるはずなのに。

そんな事を考えながら、事前にとってきたレイの武器の写真と見比べながら似た武器を探すも見つからないまま、展示場を一周しようとした時声を掛けられる。

「やあ、こんな所に来るなんて、物好きな子だな。」

軍服を纏ったその人は軍に疎い清磨も知る人物だった。

「貴方は、アムロ・レイさん?。」

その人はアムロ・レイといい、戦時中たった一人で姫級を5艦相手に生き残るはおろか、そのまま相手を殲滅した伝説を持つ人物である。

何故そんな人がここに居るのかはわからないがそのまま挨拶を現場を離れようとした時である。

「ゼノンには彼に合わせられた一点物だ、他にサンプルなどは無いよ。」

その一言は清磨にある可能性を示した、だが次の一言でそれは確信に変わる。

「力ある者同士は惹かれ合うんだ、レイにも可能性があったから放置していたが、その前に君が掛かるとは、そうだろ? アンサートーカーの、高嶺清磨君。」

あの森にあった機械は特殊な能力、つまりアンサートーカーを探す為のものであったと。

そして清磨は後に気づく自分とゆうと存在が、いずれ戦争の引き金を引くであろう人達の背中を押してしまった事を

覆すは予想を超える確信

デュオは一人古材置き場に居た、そこで清麿に頼まれたある物を自分は鎮守府に行けなかつた愚痴混じりに作っていた、

「祭り事は俺の領分なんだけどなあ、頼まれたからには仕上げねえと気が済まねえし」

デュオは集中していたからかそれとも他に人など居ないだろうと思つて居たからか遠くで見つめる人影には気づく事はなかつた。

清麿はただ固まつた、この状態の打開策がないからだ、清麿はただアムロの話を聞いた後ある所に案内されていた。

「大丈夫、さっきの話を飲んでくれれば君の安全は保証するさ、私も軍人で人でなしだが約束は守るさ」

清麿は気づいている、事が済めば、いや事が済む前にやられると、それを打開する方法は一つしかない、

そう考えている後清麿は金髪の軍人の元に連れて来られた、そこには艦娘と思われる人達と思われる人と食事しているレイの姿があった、清麿がレイに効くと、

「いや、だつともぐもぐて、お礼してくれるつてゆうから食うしかないかもしれないと思う一度は断つたがやつぱりあやかつてる所でやんす。」

清麿はレイに、帰るぞと言ひ無理矢理袖を引っ張つて連れ帰つて行く、レイは呑気に手を振っているが清麿は内心穏やかではない、

もしレイに記憶が戻れば、そう考えると清麿は来なければ、、
そう考えていたがレイの呑気そうな顔から見えて一旦自身も落ち着く事とし大きく深呼吸した。まずやる事は、、

あつたんだよねどうだった？

いやそうでもないさ、今はレイにだけ気をつけておけばいい、

家に帰つた俺は先に帰つて少しふてくされてたデュオと再会し俺の部屋に入ったまだお袋が帰つて来てないのを確認し今日あつた事を二人に話す、ある一点を除いて、それを聞いた二人は、レイは少し

慌てていたが、デュオは寧ろ驚き過ぎて冷静になっていた、とりあえず俺はある考えを伝えたそれは、、、この国軍からレイを逃がす、その為にはデュオ、お前の力が必要だ。

敵の計画は俺からするとずさんそのものだった。レイと俺が合うかどうかとも怪しいし、それにあの機械はアンサー・トーカーしか、探知できないのだから、

二人に段取りの全てを説明し二人も納得してくれた、とにかく勝負は三日後それまでは大人しくしてなければならぬ、デュオは家に帰ったがレイは責任感でどうにかなりそうになっていた、何しろ自分のせいで、初めて会った人達に、友達に危険が近付いているからだ、そんなレイに俺は「安心しろよ、どうにかなるさ、お前が気に病む事はないさ。」気休めの言葉だったがレイには聞いたのか、落ち着くとその場で安心して眠ってしまった、呑気そうだったが俺はそれに元氣と勇氣を貰えた気がして、レイを布団に入れてあげ自分も眠りについた、、、

彼は争う事を決めたの？なら僕も頑張るよ、アレの調整任せてね、そう誰か分からない人に喋りかけていた、その後ろには静かに起立している戦艦武蔵の姿かその目に見えた涙を最後に彼女の意識は消えていた、、、

その三日後港が深海棲艦に襲われていた、重巡り級、そして電巡り級二体だ、人々は一目散に我れ先にと逃げて行くがその後ろをり級が撃とうとした時颯爽と蹴り飛ばす一つの影が、蹴り飛ばされたり級は近くのコンテナに激突するが余りの強さに貫通する、それを清磨は近くの物陰に隠れながら見ていた、蹴り飛ばした影はゼノンを見に纏ったレイであったその手からは紫のムチが伸びていた、

「あんたらを止めさせて貰うぜ、そうしないと諸々ヤバくて、、、とくかかか、イキナリ！だよね！」

レイの言葉を遮る様にチ級は砲撃してくる、アムロから聞いていた情報で魚雷を積んでいない事は分かっていたので海の方に誘き寄せればこちらの被害は減らせる、その為レイは上手く立ち回り誘導して

いく、

そんな中レイはムチでなぐり飛ばすすると小さく何か聞こえた気がした、一度は無視したが次の殴りで確信が変わる、レイは清麿に慌てて連絡する、

「どうした?」

「あいつら意思がある!痛覚があるるるる!どどよこと!」

清麿はある確信を得た、それを踏まえた上でレイに判断を伝えた、

「レイ、落ち着くて聞け、深海棲艦を、、助けるぞ!」

それは全てを変える一手だった。